錦伝

立命館慶祥中学校 2年
京都研修 4組 5班
発行責任者 嶋 優花
編集委員 本多悠吾
遊塚千代吉 所 成樹
小林梨乃 児玉達哉
発行日 2012年11月10日

京の台所に根付く北海道・・・

今回私たちは京都で売られている北海道産のモノについて知るべく、四〇〇年の歴史を誇る京の台所「錦市場」を取材してきた。三九〇メートルもつづく市場のアーケードは、京都を象徴する古代色「朱・緑・黄」で構成されており、朝から大勢の客で賑わっている。で、まず気付いたのは「北海道産の多さ」である。店内には、鮭、昆布、鰊、鱈子、干し柳葉魚などさまざまな北海道産のモノが並んでいた。ではなぜ、そんなにも北海道産が多いのだろうか。取材先のお店の人たちの誰もが口にしていた言葉「品質が良い」。これが、一番の理由ではないだろうか。京都の人々はそれをよく知っており、とても人気を集めているのだ。「松村屋」さんでは、「海外のモノよりも値段が高いが、品質が良い」ということで北海道産を使っているという。さらに、柳葉魚には北海道産の中でも特に有名な鵡川町のモノを使用している。このように、北海道産にこだわっている様子が伺える。お店自身も「北海道産のモノがなくなるととても困る。」という。「北海道産」は、京の台所にかかせない存在となっているのだ。逆に錦市場内に本舗を構える包丁の有名ブランド「有次」さんの包丁を使っている居酒屋さんが北海道にある。「風香」さんだ。種類は「墨流し」というものを使っており、その名のとおり墨流しの模様に惹かれて購入したのだそうだ。「青銅製で重たいので慣れるまでは疲れやすいが、切りやすい」と店長はいう。今回、この取材を通して感じた事は、京都と北海道の食文化の交流の深さだ。北海道からは京都へ、その自然豊かな地、海から生まれる食を、京都からは北海道へ、その職人の技が交流されている。この交流を象徴すると言っても過言ではない食べ物は「京にしん」である。にしんは北海道産のモノを使用し、それを「京にしん」として加工するのは京都なのだ。正にこの「北海道の食の豊さと京都の職人の技」の合作なのだ。今回、この記事からあなたに知って欲しい事は「京の台所とまで呼ばれるその場所に北海道産が根付いている」ということの素晴らしさである。北海道人はこのことを誇りに思って欲しい。そして、もっと北海道の食の豊かさに感謝の気持ちを持つべきである。

錦市場に潜入。天上には朱・緑・黄のアーケードが…◀

京都のメガネから見える北海道とは…?!

我々五班はアンケートを取材先の人、または京都研修のプログラム内に出会った大人々に依頼して、答えてもらった。

質問の内容の一つ目は、「京都の人々から見た北海道はどんな感じなのか」。二つ目は、「京都にいて北海道を感じたときはいつか」。三つ目は、「北海道の好感度は」。最後の四つ目は、「北海道産の物は良いイメージなのか」、である。

一つ目の質問の結果は主に「食べものがすごくおいしい」「自然が豊かだ」などが大半をしめていたが中には、「都市部の道路の形が似ていて親近感を感じる」「冬の北海道は夏よりもシビアだ」などというおもしろい答えもあった。二つ目の質問の結果は主に「牛乳を見たとき」。三つ目の質問の答えは「フレッシュ」や「け、こういい」など。四つ目の質問の答えは全て「良いイメージだ」だった。

この様な結果を見ていち北海道民としてこのようなイメージを崩さないよう、日頃からできることをやっていこうと思った。

廃れない文化とは…その素晴らしさに迫る！ 祭

十月二十五日私達は、「アイヌの古式舞踊と京都の祇園祭とのつながりを知る」ために、京都市下京区にある、「京都市無形文化遺産展示室」の城―じょう―さんに取材を行った。

京都市無形文化遺産展示室に入った私達を待ち受けていたのは高さ四・六メートル、横、六・六メートルとてもも大きい大船鉾だ。この大船鉾は、五〇年以上前につくられ、古い絵図などは残されているが、設計図などでは残っていないため装飾品や絵図から大きさや構造を割り出して作られたものだ。この大船鉾は再建されず装飾品を飾る「居祭」を続けてきた。一九九〇年代に約一三〇年ぶりに祇園囃子を再開。そして燃えていなかった大船鉾装飾品一二一点が二〇〇七年に有形文化財に指定されたのをきっかけに、大船鉾復興の気運が活性化し、今、本体を復興し、二〇一四年の一五〇年の節目に山鉾巡行への復帰を目指しているようだ。

そこで私達は北海道とのつながりを知るために質問しました。一つ目が「同じ無形文化遺産にアイヌの古式舞踊があることをどう思うか」だ。それに対する城さんの答えは「アイヌも同じ無形文化遺産なので伝統的なつながりを感じます。そしてどちらも遺産であることで守らえているために展示で人に伝えることができると思う」だった。次に「祇園祭は京都の人にとってどのような存在か」だ。城さんは「街を盛り上がり、平安時代からの伝統を感じる存在」と話した。最後に「展示室を作ることで何を伝えたいか」を聞いた。「日本人の知らない人や外国人に伝えていきたいです」と城さんは答えてくれた。

それで私は、北海道特有のアイヌの古式舞踊を見て尊重しようと思った。皆さんも一度行ってみてはいかがだろう。

受け継がれる色彩豊かな京文化 西陣織、

五班の女子は西陣織会館へと取材に行ってきた。まず、西陣織とは京都市の「西陣」において製織された高級絹織物のことだ。蚕の作る絹で作られており、西陣織の特徴である細かい柄を作り出すために織る前から色をつけて織っているのだ。私たちは西陣織とアイヌの方が作った蝦夷錦とのつながりと西陣織について取材してきた。取材を受けていただいたのは西陣織会館の館長の早瀬さんだ。早瀬さんはまず西陣織と蝦夷錦について語ってくれた。そこで驚いたことは私たちが下調べでアイヌの方が中国のを元にして蝦夷錦を作り、それが西陣織に影響したと調べていた。だが、早瀬さんは「蝦夷錦を元に作っているわけではなく、中国の錦を元にして作ったのです。でも、西陣織で蝦夷錦を作ることは可能です。」とおっしゃり、とても驚いた。また、早瀬さんは「西陣織は京都に必要な存在で、私は綺麗な西陣織を作っているときが一番誇りに思います。」とおっしゃっていた。取材を通して早瀬さんはとても京都が好きで、西陣織を誰よりも大切にしようと思っていることがよくわかった。取材の最後に早瀬さんは「将来、西陣織を通して伝統産業をもっと知ってもらいたいです。そしていいもの、質のよいものは昔のように再生して使ってほしいです。」とおっしゃっていた。私は早瀬さんと取材をし、多くのことを学んだ。昔は使えなくなったものでもリサイクルをして生活していたが、今ではそのようなことをあまりみかけなくなったと思う。西陣織会館で取材をさせてもらい、今の生活を見直す必要があると感じさせてもらった。物は大切に使って長く使うことを心がけたいと思う。

最後に早瀬さんと「西陣」と書かれた石碑前で写真を撮りました。ありがとうございました。

スクープ アトリウム前にある石像が京都に・・・?!

錦市場に行く途中の大丸の敷地内で、私達は驚くべきものを発見した。

そこには、学校のバス停の彫刻と同じ、流政之さんの作品があったのだ。学校にある「NANDABE」は、慶祥の初代校長が流さんと親しく、慶祥の立地を気に入り制作して下ったものだ。

一方、大丸に置いてあった彫刻は、月に一回お地蔵さんをお祀りするための台座らしい。名前を「はんなり地蔵」という。街づくりの拠点となり京都の名所になるようなユニークな祀り方はないかと考え、世界的に有名な流さんに制作を依頼したそうだ。ちなみに「はんなり」とは、上品で華やかな様を意味する。

こんなふうに札幌と京都の繋がりは意外と身近にあるものかもしれない。視点を変えることにより身近なものがいろんな町とつながる。一人一人が様々な視点を持てば、もっとたくさんの発見がありそうだ。

あとがき

私たちがこの新聞を作ることができたのは、京都で会った全ての人たちのおかげである。この全ての方に感謝したい。取材では、たくさんのトラブルもあった。でも、それをみんなで乗り越えてこそ最高の新聞ができたのだと思う。全ての事に締めないこと。今回はそれを学ぶことができた。

5班